

令和6年度学校自己評価

令和5年度に引き続き、令和6年度も常葉大学附属菊川高等学校の教育活動においては、以下の点を重点目標に取り組んだ。

- (1) 知的好奇心を育む活動の充実
- (2) 卒業生との連携教育を強化
- (3) 地域連携教育の充実

(1)では ICT を利用した授業展開を通してさらに生徒の主体的な学びを促し、問題解決能力を高めることを目標とした。

(2)では卒業生が自校で主催するキャンパス見学会や、卒業生による講演会を通して在校生のモチベーションを高めるとともに卒業生との絆を深めることを目標とした。

(3)では菊川市とのフレンドシップ協定による「みらい学」の位置づけやボランティア活動への参加を通して地域とのつながりの意識を高め、地域に支えられる学校づくりを目指すことを目標とした。

上記内容の実践や課題を検証しつつ、今後もより良い教育の実践に努めていきたい。

なお、学校自己評価および学校関係者評価のそれぞれの評価点は5点満点である。

番号	項目	評価
1	学習指導	3.3
①	基礎知識を身につけ融合させ、多面的な思考力を養う。	3.5
②	知的好奇心を育む授業で論理的な思考力を養う。	3.5
③	探究学習で SDGs を学び地域社会の課題を考える力を養う。	3.2
④	教科横断型の授業を目指し多角的に考える力を養う。	2.9

【実践報告】「探究学習」「知的好奇心」「基礎知識・思考力」「ICT」をテーマに以下の活動を行った。

今年度は6月常葉大附属の3中高合同授業研修会のホスト校として研究授業を行うことができた。昨年度にも校内で研究授業を行ったが「ICT 機器を使ってみる」という教員の苦手意識の壁を少しでもなくすための研修であったが、その後多くの先生方が前向きに ICT の活用をするようになった。今回の研究授業はそこから一歩踏み込んで「ICT 機器を利用した効果的かつ効率的な授業の実践」をテーマとして各教科の日頃の授業の成果の発表の場と位置付けた。最新の機器を使った目新しい内容ではないが、何をどこまでやればいいのか、どういうポイントで使用するのかといった個人レベルの迷いの解消につながる内容を示すことができた。令和6年度の本校における Apple TV と接続ケーブルの合計の貸し出し回数はおよそ4000回であり ICT 機器を使用した授業が日常的なレベルになったことを裏付けている。

また、課題の配信や伝達事項の周知などに加えて、教員・生徒・保護者へのアンケート調査などには Classi が頻繁に使われるようになり教員の働き方改革の一助となっている。

教務関係の年度方針には含まれていないが、今年度は You Mark Personal を本格的に導入し、いわゆる自動採点を行うことができた。実際に使用してみると「自動採点」ではないものの、確実に採点時間を短縮することができた。同一集団の同一欄を○だけ×だけという形で採点できるため、従来の答案用紙をめくる作業や手を動かして○×を一つずつ書き込むよりも格段に効率的である。副次的な効果として生徒の答案用紙をデータとして読み込むので、テスト配布後の改竄が不可能となり不正行為の防止にも役立った。さらに Classi と組み合わせ

て答案の返却まで行うこともできるようになった。

「探究」は今年で全学年が取り組むこととなったが、昨年度に懸案とした「探究を行うための組織と予算をきちんと整備」することはできなかつたため、各学年の教務課の係りが切り盛りをすることとなり問題が残った。しかし、その一方で高校1年部において各クラスから代表者を選出し講堂において発表会を開催することができた。主幹教諭の指導のもと一年間の成果を披露する目的で実施されたが、採点基準を明確にし、事前練習もさせての実施であり、大変にレベルの高い発表会となった。今年は高校1年部でしか学年全員が集まっての発表会は行われなかったが、他学年にも広めるためには先ほども述べた組織と予算の確保が必要不可欠である。

「知的好奇心」「基礎知識・思考力」については、昨年度はグループワーク、ディスカッション、レポート提出を取り入れた授業を実践している先生方の報告が多く見られたが、今年はそれらを特別に強調する記載はみられなかった。これは実践がなされなくなったのではなく、やることが日常化し、特別な事柄と認識されなくなったからであるように感じる。

【今後の課題】

・ICT 機器の「使用」から「効果的な使用法」を考えるための研修が必要である。6月の研究授業が参考になったとの意見がある一方で、そうした授業を研究している「プロ」の模範授業を見たいという要望も多い。

・「持続可能」な探究活動を行うための組織と予算をきちんと整備する必要がある。(来年度の校内組織に探究の委員会のようなものを組み込むよう校長との話し合い済み。テキストの購入も決定済み)

・昨年の学校評価には「授業実践や ICT 機器の活用に関して教員から研修の機会を増やす要望があるが、校内での研修機会は限られることから、授業力向上月間の他校の授業見学の積極的な活用や外部の研究授業の見学などを勧める必要がある」と書いたが、実際には外部の研修や研究授業の情報が十分に伝えられなかったり、外部研修に出ようにも授業変更が難しい時間割であったりと、簡単にはいかない実情を訴える声も多数上がっている。時間割については、少人数の選択科目を減らしたことで複数のクラスと複数の科目が複雑に絡み合ったものとなっており、授業変更が実質的に不可能な状態である。今後も一層その傾向が強まることから、校内や法人内での研修の重要性が増すのではないかと思われる。

・新教育課程の3年間が終了し、カリキュラムの面で過不足や内容の検討が必要な部分が出てきており、来年度以降で本格的に変更の検討が必要である。

2	進路指導	3.7
①	生徒一人ひとりに合わせたきめ細やかな進路指導と学習指導に努める。	3.8
②	各科・コースが求める教育目標に合わせた特色ある教育を行う。	3.7
③	学生・社会人の卒業生と連携したキャリアデザイン教育を行う。	3.4

【実践報告】

高1 対象

- ・リクルート まなび教育支援 Division 進路渉外部による進路講演
- ・志望校調べ(春課題・全員)

高2 対象

- ・リクルート まなび教育支援 Division 進路渉外部による進路講演
- ・Benesse 本校担当による 2025年度共通テストガイダンス(2組・4組・5組全員、その他クラスは希望者)
- ・Benesse 本校担当者による9月スタディーサポート結果振り返り講演
- ・2月共通テスト模試に向けた補講(一貫・文理希望者)
- ・常短保育科授業体験(希望者)

高3 対象

- ・進路ガイダンス(全員)
- ・共通テスト対策補講(希望者)

- ・看護・医療系進学者対象補講(希望者)
- ・保育体験(堀之内幼稚園・愛育保育園 希望者)
- ・クリスマス会(堀之内幼稚園・愛育保育園 音楽Ⅱ選択者)

高1・高2対象

- ・分野別進路ガイダンス(合同)
- ・医療系分野聞き比べ講座(希望者)
- ・Literas 受検(全員)
- ・GTEC 受検(全員)
- ・小論文ガイダンスと小論文模試(年1回・全員)
- ・進路希望調査(9月と1月・全員)
- ・Benesse 本校担当者による11月模試と1月模試の結果振り返り講演(一貫・文理)

高2・高3対象

- ・大学別比較検討ガイダンス(希望者)

全学年対象

- ・一日ナース体験(希望者)

保護者対象

- ・高3進路保護者会
- ・2025年度以降の共通テストガイダンス(高1・高2の希望する保護者)

教員対象

- ・スタディーサポート報告会(高1～高3、年1回)
- ・Benesse 本校担当者による2025年度以降の共通テスト勉強会(4月と10月・美デー貫文理所属の教員+希望者)

【今後の課題】

- ・タブレット端末のさらなる有効活用を目指す。
- ・共通テストに関する生徒・教員・保護者向けのガイダンスを企画した。2025年度以降の共通テストは変更点や注意すべき点が多く、また受験動向の変化も激しい状況である。受験に対する正しい情報を、生徒・保護者に伝える機会の充実を図っていく。また、教員対象の受験にかかわる情報提供の場も非常に重要である。最新の受験情報に触れるガイダンスや勉強会を企画していく。教科会議や科・コース会議等の「ミニ勉強会」も有効か。
- ・一般選抜や国公立大受験を希望している生徒や保護者へ、よりタイムリーに進路情報を提供し、最後まで粘り強く受験する生徒の後押しをしていく。
- ・来年度は Classi を利用して不定期でも「進路情報」を生徒・保護者に配信し、進路に関する情報共有の場を作っていきたい。
- ・模試受験後の振り返りとその後の学習に役立つような企画を、来年度も継続して実施していく。ガイダンス内容の精査、その後の学習計画や学習状況の把握は、今年度あまり充実していたとは言い難い。来年度は Classi をさらに活用して、生徒個々の状況把握や声掛け・面談にクラス担任が利用できるように整えていきたい。

3	生活指導	3.8
①	部活動を通し社会性の育成に努める。	3.7
②	ボランティア活動へ積極的に参加させ、地域社会への貢献との関りを意識させる。	3.8
<p>【実践報告】</p> <p>『考え、計画し、達成していく能力』を身に付けさせるため、生徒自身に責任を持たせ、粘り強く努力する生活態度の育成を心掛け指導にあたった。生徒会目標に『生徒が自治する学校』があがるなど生徒の中にも自分たちで積み上げていこうという雰囲気が見られるようになった。今までは教員が順法意識やマナー意識を呼びかけ、指導を行っていたが、生徒会が発信し、委員会を中心に生徒自身が呼びかけを行うようになっていった。</p> <p>学校の安心・安全を確保していく事も生徒課の大きな役割である。教員団は HR 活動や授業、清掃活動を通し、生徒をよく観察し小さな変化も共有することができた。なるべく多くの目で生徒の変化を見逃さないように努めた。担任、学年主任、養護教諭、SC、SSW だけでなく校長、教頭、生徒課長とも会議を通して共有し迅速な対応に努めた。特に SC、SSW の存在は大きく生徒一人一人にあった手作りの教育に取り組めた。</p> <p>部活動では生徒が主体的に活動できる環境づくりに努めて、生徒が大きく成長する力になることができた。高体連主催の全国総合体育大会・全国選抜大会、高野連主催の全国選抜大会、スポーツ協会主催の国民スポーツ大会など多くの全国大会に出場することができた。部活動は競技面だけでなく生活面での成長を促すことで、最後まで粘り強く成長を続ける生徒の育成に大きな影響を与えた。</p> <p>インターネットを介した犯罪行為や SNS を使った誹謗中傷など生徒たちが加害者にも被害者になる場面が以前よりも身近になってきた。学校生活だけで指導できる範疇ではなくなってきている。家庭の教育力に負うところも大きく、家庭との連携が以前よりも強く必要になっている。</p>		
<p>【今後の課題】</p> <p>教員主導の順法意識から生徒発信の順法意識に変え、生徒会目標が『生徒が自治する学校』になった。しかしなんでもよいというわけではなく、大人の社会通念と子供たちの認識の誤差を常に確認していく必要がある。特に身だしなみの感覚やスマートフォン・タブレットの取り扱いへの認識の誤差は年々大きくなっている。しかしながらインターネットの危険性は小学校・中学校でも情報教育を受けているので以前よりもしっかりとした認識を持っていると感じている。</p> <p>次年度は目まぐるしく変わるネット環境に対し以前通りの情報教育だけでは対応できないため新しい取り組みを考えている。新しい情報リテラシー講座としてインターネット検索を駆使し、真実を探し出すゲームを通してファクトチェックや誤情報に対する意識を高めていきたいと考えている。耳触りの良い言葉や表面的な表現に惑わされず正しい情報を選択できる力がこれからの情報社会には必要である。</p> <p>『生徒が自治する学校』を目指し生徒会が身だしなみについて啓蒙を行っているが、足並みがそろっていないと言えない。生徒自身が成人感覚を身に着けるために次年度は『成人の身だしなみ講座』を実施していく。新高校三年生は年度当初、新高校二年生は 2026 年 2 月の開催を予定している。TPO をわきまえ、成人としての社会通念を学ぶ一助としていく。</p> <p>昨今の中学生・高校生が抱える心の問題は多様化している。担任や保護者、部活動顧問だけでは対応が難しいケースが増えており、養護教諭・SC・SSW の存在は非常に大きい。一人の生徒に多くの大人が関わることで心身ともに成長できる環境を作り、社会や地域に貢献できる人材の根幹を育てていきたい。</p>		

4	教員の教育力強化	3.3
①	校内研修会等で個人のスキルを多くの教員と共有し、ICT 教育の向上を図る。	3.2
②	授業アンケートによる振り返りで、授業の改善と向上に努める。	3.4

【実践報告】

「校内研修による ICT 教育や授業法の教育力向上」と「授業アンケートによる授業改善」をテーマとして以下のような取り組みを実践した。

校内研修については 6 月に 3 中高合同授業研修会のホスト校として研究授業を行うことができた。「ICT 機器を利用した効果的かつ効率的な授業の実践」をテーマとし各教科の日常的な使用法の発表を行った。「効果的かつ効率的」という最も重要な点に踏み込むことは難しかったが、「効率」や「効果」については今後も継続的に深めていくべき内容であるため、本校の授業をたたき台として他校の先生方と意見交換を行う機会を持つことができたのは有意義であったと思う。

「授業アンケート」については昨年同様に年3回行ったが授業改善に大いに役立っているという教員と、その有用性を疑う教員がいる状況も昨年と変わっていない。今年度は授業アンケートの実施の目的をまとめ直したプリントを教員、生徒に配布し、定期テスト後などに回答を行う十分な時間を確保して実施をすることができた。

加藤校長が着任し、始業式、終業式などで PowerPoint を使用した講話をしたり、学年集会において「ペップトーク」の紹介などを生徒にするなど、生徒の心に分かりやすく訴えかけるようなお話が多く、こうしたお話も教員にとってはお手本となるものであった。「教育力」というとすぐに授業テクニックであったり、進学指導、ICT 活用の上手な先生がもてはやされるが、教員の指導の場は授業以外にもたくさんあり、日常的な生徒との信頼関係が授業効果にも表れることを考えれば、より広い意味での「人を育てるための指導力」というものを意識する必要があると考える。

【今後の課題】

校内研修については ICT 機器を使った授業の次の目標をどこに置くかが大切となると思う。生徒への「効果」が数値として現れ、検証できるような取り組みを考える必要がある。

授業アンケートは教員自身が確実に改善に取り組んだことを示す必要があるが、アンケートのための授業改善にならないような検証の方法が見当たらず検討が必要である。

5	保護者・卒業生・地域との連携	3.4
①	菊川市とのフレンドシップ協定「みらい学」の地域探究学を通して、問題解決力を養い自らのキャリアデザインに役立て、社会への帰属や地域貢献に努める。	3.5
②	PTA、同窓会、後援会との共同活動を通して絆を深める。	3.5
③	卒業生(学生・社会人)との連携を深め、在校生への教育活動の一助とする。	3.4

【実践報告】

①「みらい学」の活動の一つである「アート」は、地域の子供たちとの交流の場「ジュニアアート」をはじめ、菊川市政 20 周年の記念事業「茶畑の中心で愛を叫ぶ」や様々なワークショップに参加するなど、年間を通じて積極的に活動を実践している。

1 月に菊川市で行われるプレゼンテーション大会ではその内容が高く評価され、また提案の一部が行政に採用されるなど、地域貢献にも大きく寄与している。②「きずな」や「Classi」等を利用し、以前よりも情報発信をこまめに行っている。また生徒の活動についてもタイムリーに情報発信することを心掛けており、生徒の様子ができる限りわかりやすく伝わるよう工夫している。PTA の理事会などでも行事等の映像や写真を見てもらい、本校の活動について理解をしていただく機会の一つとなっている。③卒業生の発言力を最大限活用することを心掛けている。その中でも毎年継続して行っている次の活動は特に評価が高い。卒業生が在

籍する大学を訪問し、その卒業生に学校案内や説明をしてもらう機会、また「卒業生と語る会」を通して高校在学中の心構えや取り組みを聞く機会などを通して在校生は大きな刺激を受けている。

【今後の課題】

- ① みらい学は地域貢献という観点から本校にとって非常に大切な取り組みであるが、昨年度以降活動が縮小し、「アート」のみが残る結果となった。「地域」や「保育」について、今後は本校の授業の中で行っている探究の時間を利用してそれに近いものができればと考えている。
- ② PTAをはじめ各種団体との協力関係を深め、今後も継続してより良い教育活動の実践を模索していく。
- ③ 常葉大学も含め、卒業生の力を借りながら在校生の指導に生かす循環の仕組みを今後も継続したい。

6	生徒募集	3.6
①	本校の教育内容を説明会等で伝え、多くの受験生と保護者に広める。	3.8
②	生徒・保護者に本校の特色教育を提供し、その魅力を多くの方に広める。	3.6
③	3カ年、6カ年の教育内容を充実させ、その魅力を多くの方々に広める。	3.4
④	教職員のモラルなどの研修会を行い、生徒・保護者から信頼される学校づくりを行う。	3.5

【実践報告】

本校で行う受験生向けの学校説明会を年間7回行った。また年間十数回本校の教員が中学校に出向いて説明会を行うなどした。以前と比べ中2を対象とした説明会の依頼が増え、早い段階で進路指導を行いたいという中学側の意図が見て取れる。また美術・デザイン科は本校において授業見学会やデッサン講習会を年間で合計6回行うなど、様々な機会を利用して本校の教育内容の特色や魅力を伝える募集活動を実践することができた。

【今後の課題】

今年度から学校説明会には定員を設けて募集を行ったが、途中で定員を超える状況となり、急遽増員を図るなど非常に多くの方に参加していただいた。説明会の内容についても在校生の活動や発表を多く取り入れることにより、参加者の満足度が高まったようだ。来年度は部活体験会や文理コースの授業体験会といった新たな取り組みを行う予定であり、さらに本校を知ってもらえる機会としたい。

7	組織の活性化と収支の改善	3.2
①	各科・コースの行事を共同し、互いに刺激し合い変化する。	3.4
②	科・コース・分掌が情報を共有化し問題点を多方面から検討する。	3.1

【実践報告】

各科・コースはそれぞれの特徴を生かして教育活動を行っているが、教員同士が情報を共有しながら、お互いの科・コースにとって良いと思うものを積極的に取り入れ、共同して行う活動も増えてきた。普段とは違う集団での活動によってお互いに刺激を受けことになり生徒にとっては良い側面がある。

【今後の課題】

各科・コースには独自の活動がありそれぞれで一定の効果をあげている。自分たちの科やコースにとどまらず、どのような活動が生徒にとって有効であるのかを常に考え、今までの経験に縛られるのではなく、新しい発想をもとに今後も考え続けていく必要がある。

8	中高一貫教育	3.5
①	6カ年の教育活動を通して生徒一人ひとりの成長につなげる。	3.6
②	少人数教育による学習成果で、より高きを目指し一人ひとりの進路目標を達成させる。	3.5

【実践報告】

中・高のタテのつながりを意識して“ビブリオバトル”や“高1を囲んで”を実施してきた。高校生はもとより中学生にとっても良い刺激となり、有意義な企画となった。今後も継続的に実施して、より中学とのつながりが強化できれば、保護者の期待する“6年間を通しての人間形成”が行えるのではないかと考えている。

今年度も補講やLHRの時間を使って講演会や出前授業、卒業生や上級生からの講話など、一貫独自の行事を多く行ってきた。今年度より補講は教科補講といったハードスキル醸成にかえて、『ENAGEED』や講座授業といったソフトスキル醸成に重きをおいた。これらは教員が導いて生徒を啓発していくというよりも、生徒自身が主役となって行う企画が多いため、思考力や表現力、リーダーシップやなにより人前で話す度胸が付き、今後の受験にも生きていくのではないかと感じている。

【実施したコース行事】(下線部が新たに実施した行事)

- ・新入生ガイダンス(4/11実施)
- ・一貫キャンパス見学会(6/10実施)[名城大学(OB1名協力)・名古屋大学(OG3名協力)]
- ・高1一貫保護者会(6/29実施)[親子参加](来年度のクラス編成・文理選択についての講話)
- ・卒業生を囲んで(7/11に対面及びZOOMで実施)
- ・高1生を囲んで(7/23実施)
- ・中3・高1・2ビブリオバトルバトル(7/26実施)
- ・起業講演会[LINKWIZ(株) 様][高2](7/31に本校にて実施)
- ・夏期集中講座(8/21-23 7時間ずつ実施)
- ・高3生を囲んで(9/4実施)
- ・京都大学学びのコーディネーター事業[京都大学大学院生出前授業「微生物の世界をのぞいてみよう」](12/13に本校にて実施)
- ・性教育講座[助産師 宮城 亜矢 様][高1](12/19に本校にて実施)
- ・世界青年の船[高2](2/3にきくるにて実施)
- ・企業講演会[エーザイ(株) 様・(株)ENAGEED 様](2/19・26に本校にて実施)
- ・キャリア形成特別講座[医師 松田真和 様][高2](3/12に本校にて実施予定)
- ・一貫進路体験発表会(3/18に実施予定)
- ・朝学習(英単語・数学・古文単語・漢字 …… 他)
- ・一貫コース通信(毎月発行)
- ・ENAGEED【総合探究課題】(高1・2)

【今後の課題】

上述の通り、他コースより独自の行事が多いため、一貫コースの先生方には多大な負担をかけてしまっているところがあるため、教科補講や朝学習などは次年度以降見直すなどして、一貫企画の精選を図っていく。また、2年次からの2・3組のクラス編成についても今までの踏襲では運営運用が難しくなっている。教員や生徒の負担や選択科目履修の問題、生徒・保護者のニーズなどを踏まえつつ、中等部・文理コース・普通コースと意見交換をしながら今後の在り方について早急に考えていきたい。

高校1・2年生で実施している探究学習ツールの『ENAGEED』は、探究学習はどのようなもので、どのような目的で行うのかを伝えるのに適した、いわば探究の教科書的な教材である。この教材をふまえて外部の活動に積極的に参加する意欲と行動力を期待していたが、まだまだ実際に行えている者は少数にとどまっている。また、指導にあたって若干の授業準備が必要なため一貫教員への負担が増してしまった感も否めない。次年度以降は『ENAGEED』を学んだうえでその力を生かしてアクションが起こせるような仕掛けづくりをし、ゆくゆくは「自走できる一貫生」を育てられるよう、また生徒に伴走できるように、教員側もより研鑽に努めていく。

9	常葉大学・常葉大学短期大学部との連携教育	3.2
①	進路の時間でキャリアデザインを行わせ、常葉大学での学びを知る機会を増やす。	3.3
②	探求学、みらい学における問題分析や問題解決において大学の教育力を活用し高大連携を深める。	3.1

【実践報告】

高1対象

・常葉大学ガイダンス(全員)

高2対象

・常葉大学ガイダンス(全員)

・短大保育科授業体験(草薙キャンパス 希望者)

・教養講座(常葉大学に在籍している本校卒業生による講演 全員)

高1・高2対象

・レポートの書き方講座(動画視聴)

・高1・高2保護者対象 常葉大学附属高校入試ガイダンス(動画視聴)

教職員対象

・常葉大学健康プロデュース学部健康鍼灸学科と運動部顧問とのミニガイダンス

・教員対象ガイダンス(大学・短大部の各学科教員と高校教員)

【今後の課題】

・附属高校入試に向けて、動画視聴を通じて入試に関する情報を保護者に伝えるという方法は、良かったのではないかと。同様に、附属高校入試の魅力も感じていただけたのではないかと。思う。

・大学の先生方と生徒が直接触れ合う機会を持てたことは、たいへん有意義だった。来年度も大学の先生方との連携を図っていきたい。

・本校を卒業した学生による講演も、大学での学びの先にある将来像を感じさせる良い機会だと感じるので、来年度も引き続き実施していきたい。

全体平均

3.5